

ポプラの街から

中国と日本のはざまで



LIU Qian

劉芊

リュウ・チエン

ポプラの街から

中国と日本のはざまで

劉芊

ポプラの街から

中国と日本のはざままで

発行日——1989年11月18日 第1刷発行

著 者——劉 芊 ©LIU Qian 1989, Printed in Japan

発行人——阿部 繁

発行所——株式会社共同通信社

〒107 東京都港区赤坂1-9-20 第16興和ビル

電話=営業部(03)584-3041・編集部(03)586-0449 郵便振替 東京6-671

印刷所——信毎書籍印刷株式会社

乱丁・落丁本は郵送料小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-7641-0230-7 C0095 ※定価はカバーに表示してあります。

ポプラの街から*目次

第1章 日本人を母として

- 1 ある告げ口 6
- 2 父と母の出会い 11
- 3 ポプラ並木の下で 19

第2章 文化大革命

- 4 少先隊と紅衛兵 36
- 5 「犯人」にされた父 53
- 6 姉と兄の「下放」 65

第3章 嵐のなかで

- 7 大衆裁判会 76
- 8 小日本スパイ 83
- 9 反革命分子 90

第4章

10 大雪の日 94
木の葉のように

11 父の青春時代 104

12 中ソ対立の暗雲 110

13 無断欠席 116

14 遅れた釈放 121

第5章 悪人家族

15 黄昏の川で 132

16 林彪糾弾 138

17 祖父の下山 144

18 殺人容疑 151

第6章 長夜の闇の底から

19 惜別 160

20 小学校の卒業式 167

21 晩年の祖父 171

22 中国人「殴打」事件 177

23 死不瞑目 184

第7章 移り変わる時代

24 日中国交回復 192

25 就職事情 198

26 受験 204

エピローグ 「母の国」日本へ 214

あとがき 228

装丁 菊地信義

第1章

日本人を母として

1 ある告げ口

一九六四年の初春。

「お母さんが日本人ってこと知ってる？」

ある日、近所のおばさんがこっそりとささやいた。五歳だった私は、そのとき自分がこの何気ない告げ口に一生貫かれることになるとは予測もしていなかった。

「日本」は当時の私にとって、まったく未知の国だったので、おばさんの言葉からはほとんどシヨックも受けなかったけれど、何か異様なものが、幼い胸の中でうごめきはじめてのは確かだった。それを好奇心と名づけるのは当たっていない。というのは、あのときから私は突然、憂鬱^{ゆううつ}になり、近所の子供たちとも一緒に遊ばなくなり、むしろ一人でいることを好むようになったからである。

母は普通の中国人とどう違うのだろうか。

気づかれないように母をこっそりと観察した。四部屋を持つ薄暗い平屋のなかでも、家のまわりの明るい庭先でも、目に映るかぎり、母はごく自然に振る舞っており、特に変わったところも

見られなかった。

周囲の母親たちと比較して、私はそれまで自分の母にひそかな優越感を感じていた。母はともきれいで、さわやかな印象を与えたし、どんな人ともわけへだてなく、なごやかに接していたからである。

当時、わが家は両親と二人の姉、兄と私をあわせて六人家族で暮らしていた。長姉は良い高校に入るために家からやや離れたところで寮生活をしていた。父は出張がちで、家にいないことが多かった。兄と二番目の姉は小学校に通っていたので、私は母とふたりきりで過ごす時間に恵まれていた。

幼い私たちにとって、母が怖い存在になることもあった。私はしばしば留守番をさせられたが、まだ幼稚園に通い始めたばかりのころは、広い庭のある家にポツンと残されるのがとても嫌だった。母が出掛けようとすると、ワッと泣き出して、懸命に母を引き止めようとした。そんなとき母は無言のまま私をじっと見つめ、それでも言うことを聞かないと私を小暗い部屋に何時間も閉じ込めた。

こんな母にはたして「母さんは日本人なの？ 日本人ってどんな人？」などと聞くことが出来たのだろうか。機嫌をそこねては大変だという思いが強かったために、このことを母に聞いたのはずいぶん時間が経ってからのことだった。

春も終わろうとするころ、父はいつものように出張で家にいなかったし、兄と姉も学校に出掛

けていた。私は抜けるように晴れ上がった空を眺めながら、一日中、「日本人」とは何かを自分なりに考えていた。

夕方、空がいきなりかき曇って、雨が降り始めた。母は急いで洗濯物を取り入れてから、「あつ、窓を閉めなくちゃ」と言って立ち上がった。部屋は急に蒸し暑くなってきたが、母はそんなことにお構いなく、てきばきと洗濯物をたたんでいく。

「母さん」

熱に浮かされたように言葉が口をついて出た。

「どうしたの」

私の様子を見て母は首をかしげた。

私は少しためらったあげく、勇気を出して聞くことにした。

「このあいだ、趙のおばさんが、お母さんが日本人だって言うから……。私、日本人って、どんな人か分からないでしょう。だから、教えてもらおうと思って」

「そのことだったの……。そのうち、大人になったら分かるから」

母はむしろ平然とした顔つきで、私の話をさえぎり、説明にならない説明を聞かせるのだった。

私たちのあいだには、しばらく沈黙の時が流れた。私はその横顔を眺めながら、もっと何かを言ってくれるのを待ったが、結局、母はそれ以上何も語ろうとはしなかった。

雨脚は一段と強まっていた。雨に濡れそぼつガラス窓からは、外の景色も霞んでいるようにしか見えなかった。

一九五七年に毛沢東は代表団を率いてモスクワを訪れたが、それはロシア革命四十周年を祝うとともに、その機会を利用して各国共産党の集まるモスクワ会議に参加するためだった。会議の目的は、社会主義諸国の団結を固めることとなっていた。

鄧小平も中国代表団の一員で、この会議の席上、毛沢東とともにソ連の「平和共存」路線に恐る恐る異義を唱えたと伝えられる。それによって中ソ関係も単なるイデオロギー上の対立から国家的対立へと発展したのだった。

フルシチョフは、アメリカに先駆けてスプートニクを成功させたことを誇りながら、十一月六日に開かれた最高会議の席上、「十五年以内にソ連は重要生産物の生産量において、アメリカに追いつき、追い越す」と宣言したものだ。そして、そのソ連に負けないよう、毛沢東も「中国は十五年以内にイギリスに追いつく」と宣言したのである。

毛沢東は帰国後、農村での水利建設や肥料増産計画を推進するとともに、工業面では鉄鋼生産を飛躍的に増大させる、いわゆる「大躍進政策」を打ち出した。しかし、この政策は五九年七月になると、経済建設面で大混乱をきたすようになり、農村ではかえって飢餓が蔓延する結果を引き起こしてしまった。

こうした困窮期にもかかわらず、一九六〇年夏、ソ連は中国に対する経済援助協定を一方的に破棄し、専門技術者を引き揚げたうえ、朝鮮戦争時の借款返済を要求した。ソ連は中国の屈服を引き出そうとしたのだが、中国はあっさりとソ連の要求に応じ、「自力更生」の道を歩みはじめた。

そこで「大躍進政策」の失敗をうめあわせる一連の調整にあたって、劉少奇や鄧小平らが「四清運動」（社会主義教育運動）の前身を展開することになった。

ところが、この「四清運動」はその後一転して、毛沢東と劉少奇が直接衝突する原因となり、いわゆる「文化大革命」の導火線ともなったのである。

「私は長い間、諸君から圧迫を受けてきたが、ずいぶん我慢したのだから少しは諸君に反撃してもいいだろう」

毛沢東は六二年九月、河北省の北戴河で開かれた会議でそう述べた。

「一九六〇年以来、暗黒面が描かれるばかりで、思想が混乱している」と毛沢東は批判し、まず農村から教育運動を起こそうと提案した。この運動は結局、各方面に広がって、最終的には「今回の運動の重点は、党内の資本主義への道を歩む実権派を一掃することにある」（六五年中央会議）と言われるところまで発展していく。

一九六四年にまだ五歳にもならなかった私には大人の世界は分からなかったし、母が日本人で

あることが、中国ではどういう政治的意味を持つのか、見当もつくはずがなかった。母はせめて、子供には政治的ショックを受けさせないようにと、ひそかに気づかっていたのかもしれない。しかし私のほうは「母さんはどうしてちっとも教えてくれないのだろう」と、いぶかしく思うだけで、自問自答を繰り返して苦しむ毎日が続いたのだった。

幼いころ、私は病気がちで、一時は毎日のように母に連れられて、通院していた。ともかくよく泣く子だったらしい。近所の子供に指をさされただけでも、母の後ろに隠れて泣きだすありさまだったという。

母はさぞかし困惑していたにちがいない。姉や兄を育てるときには悩んだことのなかった母が、私にはすっかり頭を悩ませてしまった。昼寝のときも母がすぐそばにいないと寝つけなかった。毎日、話をしてあげるからいい子になるのよ、とほほ笑みながら、母は「白鳥の話」や「ひな菊の話」「みにくいアヒルの子」などを語ってくれた。

2 父と母の出会い

ある日、仕事で多忙な父が胃潰瘍かいよくで入院した。心臓も悪いという診断が出されて、退院してか

らも家に帰らず、温泉のある遠い町に送られた。

父が静養のためにいなくなったあと、家のなかは平素より広くなった感じで、いつそうがらんとしていた。母は一人きりでますます育児に励まなければならなかった。花がいっぱい植わった広い庭の一隅に野菜を栽培しはじめたのもそのころからだ。病氣などで休職する人の扶養家族には国が最低限の生活保障をしてくれるのだが、それだけではとうてい不十分なので、せめて野菜くらいは自分のうちで作ろうと思ったのである。

病氣がちの私に母は以前よりも注意を払うようになった。いつも母のかたわらに置いてもらった私は、母のよき観察者であると同時に、よき話し相手にもなろうとした。庭で野菜の手入れをするときなど、畝をこしらえた畑の前にしゃがんで、じっと母の仕事ぶりを眺めたり、ときに話しかけたりしたものである。

「母さんは何でもできるのね」

ある日、小松菜を抱えているのを見て感心したように言うと、母は嬉しそうに答えた。

「そうよ、何でもできるのよ。母さんと一緒にいれば心配することはないのよ」

「やり方は誰が教えてくれたの」

「さあ、誰でしょう。色んな人たちに教えてもらったわ」

といっても、幼いときの母は意外にも甘えん坊だったらしい。そのことは、ずいぶん後になって母の叔母にあたる人から聞かされた。十歳になっても芝居見物に出かける途中でぐずって歩か

なくなったり、自分が気にいらぬ料理が出てきたときには食べなかつたりしたのだそうだ。

ところが、運命のいたずらというのだろうか、二十歳になったばかりの母は、それまでの生活とまったく異なる人生を送らなければならない羽目になってしまった。

一九四五年、青春の真つただ中にいた母には、第二次世界大戦がわずかあと一カ月で日本の敗戦で終わることなど知る由もなかつた。使命感に燃える看護婦として学校も卒業せずに、憧れの中国大陸に渡つたのである。

身も心も軽やかにはずんでいた当時の思いが、のちにどれほど祖国への感傷と哀惜にさいなまれる結果になったか、私はいまになって母の思いを想像する。

「いくら国の命令とはいえ、よその国へ行つて戦うことに当時は罪悪感を抱かなかつたの」

最近、母にこう尋ねたことがある。

「あのとき母さんは医療隊にいて、命を救うことが最も神聖なことだと思つていたし、軍隊に務めている伯父に会えるのも嬉しかった。それに半年で帰国できるとのことだったから、振り返ってみれば、あのときは合宿に行つたみたいない氣持ちだったのよ」

母はそう語るのだった。

しかし実際には、その半年のはずの「合宿」が三十年以上の長きに及んでしまつたのである。

終戦を迎えたとき、母は山の中に逃げ込んだという。その山は中国北部の端にあつたそうだ。

一九四五年九月二日、日本は中国側に全面降伏を通知し、それによって八年にわたる日中戦争もようやく終焉^{しゆうえん}したが、中国国内では国共内戦やソビエト軍進入が依然として続き、銃声は絶えることがなかった。

戦乱の中、燃えくすぶる家々を捨てて帰国する日本人家族の惨状には、心痛むものがあつただろうが、感傷にうちひしがれていたのでは、帰国の道が途絶えてしまう。昼も、夜も、砲撃の下をかいくぐって、流れに流されていく人々の群れのなかを母は急いだ。

気がつくと、身寄りのない母はたった一人きりになっていた。山の中でかたつむりや木の実までも口にしたそうだ。山の頂に立つと、その下には田畑や野原、林などが広がり、目をこらすと小さな人影までもがあちこちに動いている様子も見える。自分はそのまま「生の世界」から切り離されてしまうのかと思いつつも、母は銃弾とソビエト軍を懸命に避け、漆黒の夜に耐えた。

逃げ出す途中、中国人との接触は避けるようにした。もし助けを求めても、どんな目に合わされるかを想像するだけで不安と恐怖を感じたからだ。しかし、狼のように称されていたソビエト軍に出くわすのは、もっと恐ろしいことだったという。

幾日も山での生活を続けているうち母は死の影に直面していた。すべてこれからだったはずなのに、希望にあふれていた若い生命を異国の山に埋もれさせるのかと思うと、いたたまれない気分になった。何とかして助かるすべはないのだろうか。だが、どう考えても生きることを断念するほかに道はないように思えた。